



土師皿出土状況



石列（左）と小鍛冶炉の可能性のある焼成面（右）



調査で出土した軒瓦

遺構の年代と性格

今回の調査で確認された遺構は、鍛冶工房跡と考えられます。出土土器から12世紀後葉のごく限られた時期にのみ操業したと判断され、平氏が福原を支配していた時代とぴたりと重なります。工房の規模はひとつの屋敷の鉄製品をつくるだけにしてはやや大きく、遺構から出土する鉄製品には、釘や工具と思われる小刀などが多いです。このような状況からは、この地で清盛の時代になりにまとまった量の釘そのほかの鉄製品が必要となったことがわかります。またこれまでの研究で小鍛冶（熱した鉄を叩いて道具をつくる作業）と大工はかかわりが深いことがわかっていますので、この工房は、福原京での建物建設にともなう小鍛冶場だった可能性が高いです。

中世の手工業工房は、地方の場合、有力者の敷地や役所の中に構えることが多いですが、今回の調査では複数の「東播系瓦」（平氏とかかわりの深い播磨で生産された瓦）が出土していることなどから、工房の北側には、屋敷があったと推定されます。清盛の山荘からほど近い調査地の立地からは、今回発見された鍛冶工房が、福原京の成立にともなって上昇した建築需要に広くこたえるためのものだった可能性があります。

にわかづくりの福原京には、貴族邸宅が平氏政権による土地配分に基づき次々と建築されるはずでした。しかし源頼朝が東国で挙兵し、対応におわれた清盛はわずか半年で新都を捨て、上皇らとともに平安京に戻りました。そしてその一年後熱病で世を去り、政権の崩壊が始まります。福原の地に鉄製品を供給した工房の操業期間が12世紀後葉の一時期に限られているのは、こういった平氏政権の動向とかかわりがあるのかもしれない。

今回の第25次調査は、下三条町地区防災街区整備事業に伴い行っています。調査で見つかった遺構の性格や内容については、現段階での見解です。今後も引き続き検討を進めてまいります。

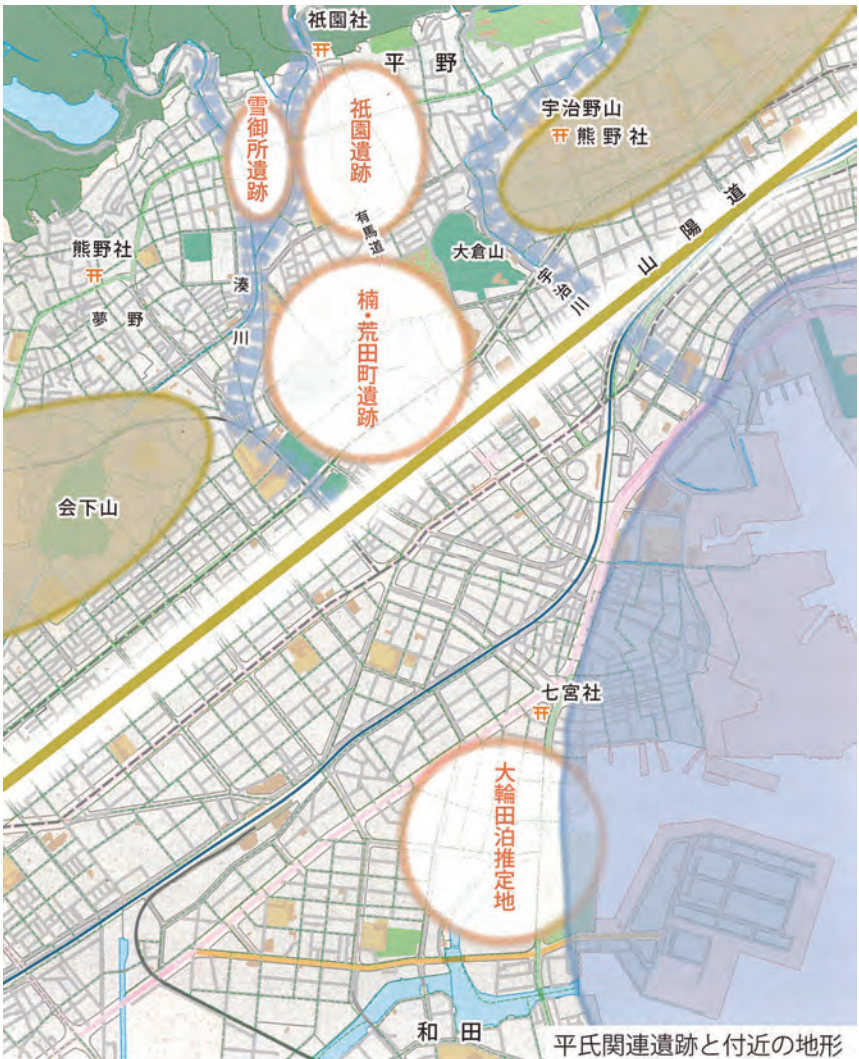
祇園遺跡の発掘調査

第 25 次調査 現地公開資料

2025 年 9 月 13 日 / 神戸市

祇園遺跡と福原京

祇園遺跡は、平清盛が平安京に代わる新都とした「福原京」の跡地と言われる遺跡です。「福原」は兵庫区荒田町から上祇園町一帯にかけての地で、応保二（1162）年に清盛が支配して以来平氏の西国支配の拠点だった土地です。清盛は仁安四（1169）年頃から福原に建てた山荘でほとんど過ごし、政治上必要な時だけ京へ上る生活をしており、福原山荘周辺には平氏一族の邸宅が点在していたようです。平安時代も終わりに近い治承四（1180）年の六月二日、清盛は安徳天皇、高倉上皇、後白河法皇を伴い、平安京から福原の地に移りました。福原では上皇は清盛邸、法皇は清盛の異母弟教盛邸に滞在、同じく異母弟である頼盛邸が天皇の在所として臨時の内裏とされました。この時点では清盛に福原を都とする意図はなく、より海に近い「輪田」の地に「輪田京」を築く構想を抱いていました。輪田京が計画された輪田荘は、現在の神戸駅あたりから和田岬までの一帯で、清盛が改修した港「大輪田泊」（現在の神戸市中央卸売市場本場周辺）を含んでいました。しかし、輪田は狭すぎて平安京のような都の建設が不可能だと判明します。その結果、仮の住まいであったはずの福原を区画して、都から転居してきた貴族たちの邸宅として割り振り、新都「福原京」が誕生しました。



今回の調査地

今回の調査地

祇園遺跡での発掘調査は、今回で25回目になります。これまで平安時代の邸宅跡や庭園跡とみられる遺構が見つかっています。遺構の時期は①10世紀から11世紀②12世紀末期の二時期があり、②が平氏関連の遺構です。②の時期にあった清盛の福原山荘（雪見の御所）は、現在の雪御所町にあたる天王谷川右岸にあったと考えられます。今回の調査地は、②の時期に有馬街道に接続する東西の大通りに面した屋敷地の一画と考えられます。



祇園遺跡 / 雪御所遺跡 調査地位置図（大路と雪見御所の復元・推定は、高橋昌明・足利健亮・須藤 宏氏等の案によった）

■ 主な祇園遺跡調査地点 ■ 主な雪御所遺跡調査地点

調査で見つかった遺構

今回の調査では、平安時代末期の鉄器生産に関する遺構が発見されました。①【小鍛冶炉】は、鉄素材を熱して柔らかくするための炉です。今回見つかったのは硬く焼けしまった炉周囲の残材が集積したもので、この下に炉跡があるのではないかと考えられます。遺構のそばから送風管（羽口）が出土しています。ふいごと呼ばれる風を起こす装置から、この管を伝って酸素が炉に送られ、炉の燃焼温度をあげる仕組みです。②【金床石】は、小鍛冶炉で高温に熱した鉄素材をハンマーで叩き、釘や小刀などの製品に仕上げる台です。一辺が40cmくらいの六甲山花崗岩の平らな面を上に地面において使用したと思われます。使い終わったものが廃棄された状態で見つかりました。③【作業坑】工房内で作業をするためのスペースか燃料置き場と考えられます。直径3～5m、深さ40cm以上ある不整形や不整形のくぼみで、くぼみの周縁は人の頭ほどの六甲山花崗岩で囲われていたと考えられます。①や②の遺構は、この穴の周囲に設けられており、くぼみの外周には炭粒を多く含む土の溜まった直径1m未満の土坑が複数存在しています。作業場で出た炭混じりの灰などを捨てた痕跡ではないかと思われます。④【石列】六甲山花崗岩を平らな面を上に一列に並べた施設です。作業坑と小鍛冶炉の間を横切るように敷設されています。今回の調査では、小鍛冶炉の可能性のある箇所が3基、金床石1基、作業坑3基、石列1列が見つかりました。作業坑の周囲には、柱穴と思われる直径30cm未満のピットがいくつか確認されていることから、簡易な柱の建屋におおわれていたようです。これらの遺構の複数箇所、土師皿とよばれる土器がまとまって埋められており、作業後に祭祀を行った可能性があります。



室町時代の『職人尽絵巻』に描かれた鍛冶師と大工 三彩新社刊『古美術 74号 職人歌合絵の世界』より



今回の調査で出土した送風管（左）と土器（右）